

一人一人が未来の創り手となる豊かな学びの創造

— 高等学校保健体育科における「問い」と「振り返り」の工夫を通して —

指導主事 岩崎 敬志

研究協力員 熊本県立鹿本高等学校 教諭 池田 将文

1 はじめに

今後ますます予測が困難になる時代を迎える中、人生設計は100年を要する世代となりつつある。生涯健康で豊かな人生を過ごすためには、個々の努力もさることながら、社会全体で支えあっていくことが、必須の条件となってくる。そのためには、一人一人が未来の創り手となり、社会の形成者としての自覚と使命感を育むための学びが必要である。

本実践では、単元学習を通して、生徒と幼児が体育的活動の関わり合いを持つことにより、高校生としての社会的役割は何かを考え、社会・地域の発展に貢献しようとする態度が育まれることをねらいとしている。

2 研究の視点について

(1) 視点1『見方・考え方』に着目した問いの工夫について

高等学校学習指導要領解説保健体育編（平成30年7月文部科学省）によれば、保健体育科における体育の見方・考え方は、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適正等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」と示されている。

生涯にわたる豊かなスポーツライフを継続するための視点から、運動やスポーツの果たす役割を考えさせる問いを工夫する。

(2) 視点2「学びを実感する振り返りの工夫」について

毎時間で「初めて分かったこと」、前時と比較して「改善できたこと」を振り返らせ、次時に対する意欲の向上を図った。また、『社会の一員として、運動を支えること』に着目し、自分たちがどのような役割を担うべきなのかを考えさせるきっかけとなるように振り返りを設定する。

3 研究の実際

検証授業 高等学校第2学年

単元名 スポーツを通した社会参画に関する課題研究

(1) 本単元の授業設計

実習、体験、発表等の課題研究を通して、知識・技能の重要性を改めて認識し、情報の分析・評価、論述や熟考、評価などの言語に関する能力の育成に資する。また、生涯を通した豊かなスポーツライフの実現に向けた見通しを立て、スポーツと多様にかかわることのできる能力の育成を目指した。

(2) 単元の目標

スポーツの専門的な知識や高度な技能の総合的な活用を目指した課題研究を通して、生涯を通した豊かなスポーツライフの実現及びスポーツの振興発展にかかわることができる資質や能力を育てる。

(3) 単元計画

(単元を貫く問い) 子どもが身体を動かすことが好きになる運動プログラムを考えよう

時	学習活動
1	異年齢交流活動の意義を学ぶ。
2	幼児期の特性と動きについて学ぶ。
3	幼児の運動プログラムを考える。
4	事前交流を通して幼児の動きと身体的な特徴をつかむ。
5	
6	考案した幼児の運動プログラムを修正・変更する。
7	リハーサルを実施して実践する幼児の運動プログラムを完成させる。
8	交流会を通して幼児の運動プログラムを実践する。
9	
10	実践を終えて、成果と課題を考える。

(4) 研究の視点

〔視点1〕

- ① 運動の価値や特性に着目し、幼児にとっての体を動かすことの楽しさや喜びの本質と体力向上を図る活動を考えさせる問いを工夫する。
- ② 「スポーツを支える」という視点から、スポーツを通した社会貢献ができる能力を育成する問いを工夫する。

〔視点2〕

- ③ 毎時間で「初めて分かったこと」、前時と比較して「改善できたこと」を振り返らせ、次時に対する意欲の向上を図る。
- ④ 『スポーツを支えること』に着目し、自分たちが社会の中でどのような役割を担うべきなのかを考えさせるきっかけとなるように振り返りを設定する。

(5) 授業の実践

ア 幼児の運動プログラムの作成（第3時）

幼児の運動プログラムを作成するにあたり、「ルー



ルが簡単である」「動きが複雑ではない」という2つのポイントを中心に各班で話し合いがなされた。対話の中

では、次のような発言が見られた。

- 幼児が運動の楽しさを感じるためには遊びの要素が必要だと思う。
- ゲーム形式にしたほうが喜んで動くと思う。
- 幼児が体験した可能性がある遊びのルールを工夫しよう。

特に、幼児年代の弟・妹を持つ生徒からは、貴重な発言が出される中、一人一人が考えを伝え、話し合いによって意見をまとめ、発展させていった。そして、幼児期の身体的特性と親しみやすい日本伝承の遊びと関連させて、次の3つの運動を実施することにした。

① 「貨物列車」

体ほぐし運動との関連を図り、体を使って動きを楽しみ、仲間との体の接触で円滑なコミュニケーションを図る運動

② 「達磨さんが転んだ」

日本伝承の遊びでもあるが、体力を高める運動との関連を図り、鬼までの距離を25m程度とすることで運動の負荷を強くした。ダッシュする時の瞬発力と静止することを繰り返すことでインターバルトレーニング法的な運動要素となり、心肺機能の向上を図ることができる。走る快感、止まるタイミング、スピード感、距離感、友達と遊ぶ喜び、ルールを楽しむ、社会性の発達を促す運動

③ 「鬼ごっこ運動」

瞬発力、俊敏力、持久力、判断力、チームワークなどスポーツを行うのに必要な要素が多く含まれる運動（小学校入学以降に本格的なスポーツを経験する際に、陸上競技等の基盤となる。）

イ 幼児の動きの特徴をつかむための事前交流会（第4・5時）

幼児の運動プログラムを完成させる前に事前交流を行った。目的としては、自分たちが持っている幼児のイメージと実際の幼児の様子ギャップに気づき、考案中の運動プ



ログラムの修正・変更に生かすことである。交流後の振り返りで、自分自身の準備不足や自分の行動を改善すべきだと感じた生徒が予想以上に多かった。また、具体的な改善点を以下のように挙げていた。

- 幼児に分かりやすい言葉選びをする。
- 幼児の興味があることを調べて、次の交流時に話すきっかけにする。
- 目線を合わせて話す。
- オーバーリアクションをする。
- 笑顔で接する。

振り返りからは、運動や動きそのものだけではなく、コミュニケーションに関しての感想も多く聞か

れた。現時点での運動プログラムに一定の手ごたえは感じる一方で、課題が明確となることで幼児に対する生徒たちの興味・関心の高まりを感じるようになった。

ウ 考案した幼児の運動プログラムの修正・変更 (第6時)

生徒たちは3つのポイント「けがをさせない」「分かりやすく説明する」「ルールを守らせる」ことが運動プログラムを提供する際の共通認識として確認し合った。事前交流での気づきと幼児へ配慮することなどを踏まえ、生徒一人一人の役割を明確にすることとした。

また、説明の際は言葉の選定に心がけ、目線の高さや会話のスピード、視覚的に伝えることなど、幼児への接し方をどうすべきなのか意見を出し合った。



エ 幼児の運動プログラムの実践 (第8・9時)

当日は、保育園から鹿本高校まで幼児と一緒に歩き、コミュニケーションを取ることでスムーズな進行に備えた。

「幼児に運動の楽しさを伝えよう」を目標に、体を動かす喜びや心地よさといった運動の価値を伝えるとともに、ルールや約束ごとといった安全面に配慮した言葉かけを行った。



各班の司会や教師役の生徒は、想定外の動きをする幼児に翻弄されながらも、3つの運動プログラムを幼児に伝え実践を行った。コンビ(ペア)役の生徒は幼児の動きを観察し、修正点を身振り手振りも交えながら、一生懸命に幼児と向き合っていた。

その中で、幼児の動きが予想以上に活発になり、進行が早くなってしまうことがあった。その際、休憩を入れた時間を利用して、教師役や担当班を中心に他の生徒も集まり、その後の実施内容について、幼児たちのニーズを推量しながら、意見をまとめる場面があった。授業中に自分たち



で修正ができたことは生徒にとって大きな経験となり、「伝えること」に真剣に取り組む姿勢から、生徒たちの主体性が強く感じられた。また、幼児からの「楽しかった」「また遊びたい」という言葉が生徒にとっては大きな喜びと達成感につながり、地域社会への関わりを強く意識することになった。

(6) 検証結果と考察

① 学習アンケートより

表1は、実践の前後に調査した質問紙調査の結果である。特に、次の質問項目について有意な向上が見られた。

表1 「学習に関するアンケート」結果より抜粋 (n=30) 4件法

有意確率**<0.01 *<0.05

質問項目	事前	事後	差
⑭授業の中で、課題を意識しながら、解決策を考えることができる。	2.72	3.11	0.39 **
⑦友達と話し合ったり、協力したりしながら学習に取り組んでいる。	2.80	3.16	0.36 *
⑪スポーツとの様々な関わり方を考えながら学習に取り組んでいる。	3.10	3.44	0.34 *
⑤何を学んだのか、どのように学んだのかについて振り返っている。	2.42	2.73	0.31 *

質問項目⑭及び⑦からは、児童の身体的特性を理解して、魅力ある運動プログラムを提供するという課題に対して、生徒同士で協力し対話を重ねながら解決策を探っていった結果、有意な向上が見られた。

質問項目⑪については、視点1の見方・考え方に着目した問いの工夫に関連しており、「スポーツを支える」という視点での学びを通して、社会参画ができる資質の育成につながっていると思われる。

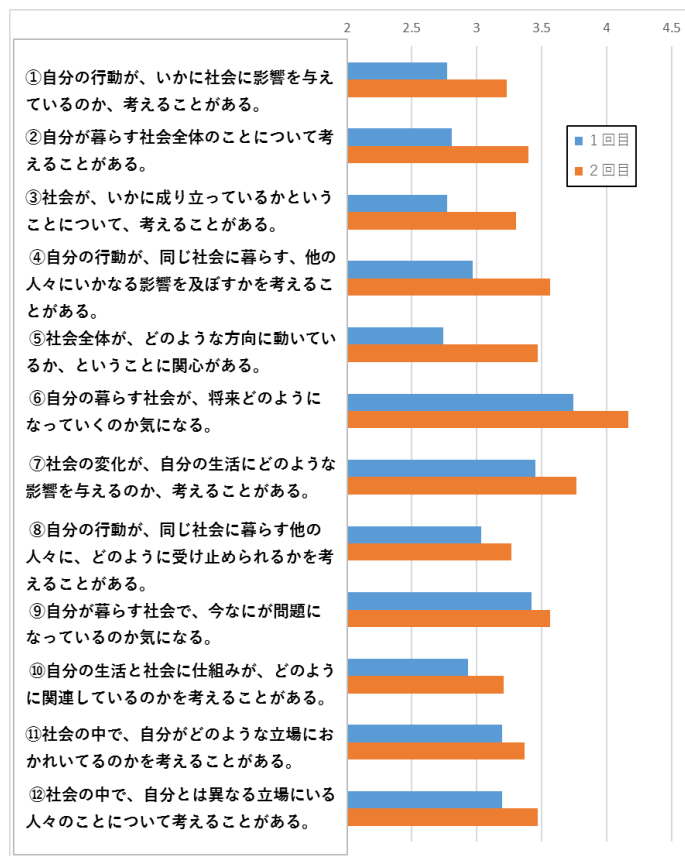
質問項目⑤は、視点2の学びを実感する振り返りの工夫に関連する。幼児期の運動に関して初めて知ったことを時間ごとにまとめ、事前の交流を終えて改善すべきことを振り返らせ、次時につなげることができたと思われる。

② 学習活動より

スポーツを支えるという視点と学びを振り返る中で、幼稚園児に運動を提供し全員が楽しかったと感じる一方で、自分たちで計画した内容を準備していても、実際に保育園児を動かすことの難しさを感じたり、園児間の運動能力の差に苦慮する場面等がワークシートの感想から多くうかがえた。

生徒たちは、主体的な学びを重ねる中で、受身の立場では味わえない充実感と困難さを感じたと考えられる。

グラフ1 「社会考慮尺度アンケート」(n=30) 4件法



社会考慮尺度アンケートでは、12の質問項目の全てが向上する中、特に「自分の行動が、同じ社会に

暮らす、他の人々にいかなる影響を及ぼすかを考えることがある。」という質問を筆頭に6項目に有意な向上が見られた。幼稚園児に運動プログラムを提供したことで、地域社会における自らの存在を確認し、自分の学びが社会と直結しているのを自覚したのではないと思われる。

4 研究のまとめ

今回の研究では、「子どもが身体を動かすことが好きになる運動プログラムを考えよう」という単元を貫く問いと毎時間の振り返りを意識した学習活動を行ってきた。この研究を通じた成果は2点挙げられる。

1点目は事前交流の学びで幼児の行動パターンや運動能力、思考力などを把握できたことで、自分たちのやるべきことへの見通しが立ち、本番に向けてのモチベーションが上がり、仲間と協力しながら創意工夫し、主体的な活動が展開できるようになったことである。

2点目は教育課程の一部を地域に開いたことで、社会全体の中で、今まで意識していなかった部分にも視線を向けることができるようになったことである。感想の中からは、将来の姿を考えるきっかけとなった生徒、保護者やお世話になった人に改めて感謝する生徒、親になることの責任を考えた生徒など、新しい価値観が生まれ、自分自身の存在意義について考えるようになったことがうかがえた。

この成果の背景には、問いと振り返りを段階的に行ったことで、学習の見通しが立ち、次の学びにつなげることができたことと、自分たちの課題を共有できたことで、意見交換が活発にできたこと、さらにはスポーツを通して人を支えることや人の役に立つ経験をしたことで、それまで自分中心でしかなかったスポーツへの考え方から脱却し、スポーツが社会全体へ与える影響について考えるようになったことが考えられる。最後に、今後のこの取組をさらに発展させ、この豊かな学びを高校生としての社会的役割を考える機会とし、地域社会における未来の創り手となる契機になることを望んでいる。

《引用・参考文献》

- ・斎藤和志(1999)愛知淑徳大学心理学部「社会考慮尺度」
- ・文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領解説 保健体育編」